

玉川上水・野の花だより No. 10

誰一人取り残さない (Leave no one behind)

中央大学研究開発機構・機構教授 東京大学名誉教授

石川 幹子 2026年 5月14日

2026年4月3日に、大山緑道（四條橋～五條橋間）で、近隣保育園の子どもたち、地元の皆さま、渋谷区の協働により野草の植え付けが行われました。1株もかけることなく元気にすくすくと育っています。野の花ですが、「誰一人取り残さない」というSDGsの精神を、彷彿とさせる風景です。

渋谷区土木部の皆さまが、黒土をいれ、柔らかな土壌をつくってくださいました。午前から午後、そして夕方にかけての適度な日照、緑陰、灌水、風通しの良さなど、野の花にとっては、この上ない環境です。開花がはじまったカノコソウ、トリアシショウマをご紹介します。散歩をしながら、何気ない風景の中で楽しむことのできる「野の花の道」が、誕生しています。

この考え方は、「国立科学博物館附属・自然教育園」（港区白金台）の「路傍植物園」に学んだものです。自然教育園は1664年（寛文4年）に、高松藩主松平讃岐守頼重の下屋敷となった地ですが、室町時代からの豪族の館（たて）跡があり、現在でも土塁が残されています。武蔵野の原風景を守り、公開されているものとしては、都内で屈指の緑地です。「玉川上水旧水路緑道」は、暮らしの中に武蔵野の自然環境を回復するもので、極めてチャレンジングな試みです。



カノコソウ（鹿の子草）

桃色の小さな花が鹿の子紋りに似ていることから、この名前がつけられたと言われています。



トリアシショウマ

不思議な名前です（若葉が鳥の足に似ているため）。新緑のなかで繊細、かつ華麗。

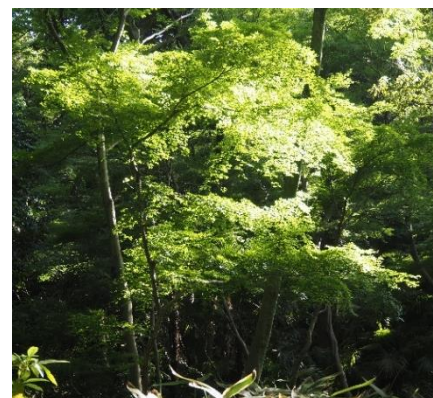
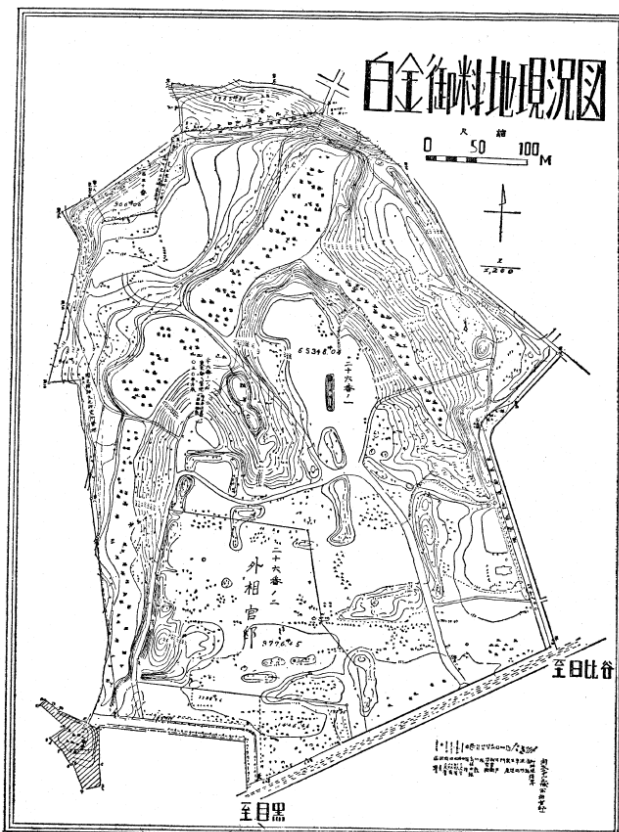
参考：武蔵野の自然を今日に伝える「国立科学博物館付属・自然教育園」
東京都港区白金第5-21-5

自然教育園は、室町時代の豪族の館跡（白金長者といわれました）が、江戸時代に高松藩主松平讃岐守頼重の下屋敷になり、明治期には、陸海軍の火薬庫となった歴史的経緯があります。大正6年には宮内省の白金御料地となり、戦後になり、「天然記念物及び史跡」に指定され（昭和24年）、武蔵野の自然環境が、手堅く守られてきました。明治神宮が創建される時には、有力な候補地となりましたが、面積が約25haと狭小だったため、代々木の地に決定されたという経緯があります。しかし、樹木総数は1万1900余本であり、その内、571本が大八車で、代々木の地に運ばれたと、『明治神宮造営誌』には記載されています。すなわち、明治神宮の杜の一部は、白金御料地に由来することとなります。

次の図は、「白金御料地」のもので、館跡の原地形を読み取ることができます。目黒通りに面した一角は、「外相官邸」と記載されています。朝香官邸の場所で、アール・デコの美しい邸宅は、「東京都庭園美術館」として公開されています。

西洋庭園の広い芝生地と日本庭園が創り出されています。戦後、ここに住まれたのは、時の内閣総理大臣・吉田茂でした。

風雲急な時代、窓辺に広がる草木のそよぎに、どのような思いをめぐらしていたのでしょうか。



白金御料地現況図

出所：『日本公園百年史・総論』 288頁

新緑に輝くイロハモミジ

2026年5月10日撮影

白金自然教育園

2026年5月10日撮影

路傍植物園



東京都庭園美術館 (旧朝香宮邸)

